

第6学年 道徳学習指導案

日 時 平成18年6月29日(木) 5時間目
児 童 函館市立戸井西小学校 6年1組
男子10名 女子7名 計17名
指導者 藤 原 友 和

1. 主題名

「思いやりの心」2-(2)

2. 主題について

本時の授業に先立って行った授業がある(※「道徳実践レポート」参照)。その中で、『思いやり』とは何か」という項を起こし、次のように定義した。

- ①関係性における
- ②自然な感情を前提とした
- ③利他的な行動である。

私は、「思いやり」の出発点において情意的な側面を重視し、授業のねらいとして「知的レベルでの反省を促す」ことを掲げた。情意面だけが「思いやり」ではないが、前提にある感情の発露が伴うのは自然であると考えたのである。

この点に関して、荻原武雄氏(元全国小学校道徳教育研究会会長)の次の言が参考になる。長くなるが引用する。

それでは「思いやり」とは何か。“金持ちの貴婦人が、貧しい靴磨きの少年に対し気まぐれに金貨を投げてやる”などというのが思いやりであるはずはない。「思いやり」は、“さげすみ”、“思いあがり”、“傲慢”のようなものとは無縁である。

「小学校・思いやりの心を育てる指導」(昭和六一年 文部省)から引用すると、「それは、元来、『思い』を『遣る』ことであり、想像し、推察するという意味である。他者の内面はあらわに見えるものではない。つまり、そこで見えない心を推し量るということは、何んらかの対象に接して起こる喜怒哀楽のような心の直接の反応を超え、自分の立場を超えてなされるものであり、単なる感情ではない想像力という知の領域に属する事柄である。『思いやり』を、ただ人間の直接的感情にとどめる限り、そこでなされる親切は相手にとっておせっかいになり、その優しさはなれなれしい甘えになりかねない。その意味で、『思いやり』は、思いやる人間の自覚する立場が求められる心と行為である。」のであり、人間として平等な立場で、相手のことを深く考え、行動することなのである。すなわち、そこには相互の信頼関係を深めること、自らを律し相手の立場に立つこと、広く公正な心で行動することなどの要素が大切であると考えられる。

(明治図書『道徳教育』No.574

連載「道徳授業の基礎講座」『思いやり』についての一考①)、下線は藤原)

自然な感情の発露であることは否定するものではなく、そこから出発して「知」の領域での自覚的「行為」が求められるという点で、主張を一にするものである。

本時で扱う主題についても、このように押さえない。

子どもが、「何か、自分にもできることをしたい」と思う自然な感情は大切にしたい。しかし、その一方で、「なぜそれをしたいのか・すべきなのか」という自分への問いかけをする姿勢もまた大切にしたい。

人を思いやることも、親切にすることも、できることはできる。ただ、次のことが同時にあることが大切なのではないだろうか。

なぜそれをするのか（したいのか、すべきなのか）を考える謙虚さ

盲目的な親切は「おせっかい」であり、「相手のためにしたことは喜ばれるべきだ」という「おしつけの思いやり」に堕してしまう。「広く公正な心」は、前述のような内省のないところには育たない。

3 資料名 「心の窓 17 思いやり」（石山ピアノ調律サービスHP「ぴあの屋ドットコム」）

<http://www.pianoya.com/index.htm>

4 資料について

「ぴあの屋ドットコム」は京都市在住のピアノ調律師が運営するサイトである。

主たる内容は業務に関することだが、「心の窓」のコーナーでは、運営者が日々の仕事や生活を通して感じたことがらを随想風に綴っている。その一つ一つが子どもと共有したくなる心温まるエピソードにあふれている。本実践で教材化した「思いやり」もその一つである。

「思いやり」は、話材ももちろんだが、構成が素晴らしい。

まずは「何かの本に書いてあった言葉」の紹介から始まるのだが、ここで明確に、「思いやりとは行動が伴ってこそ真の思いやりである」ことを述べている。

次に「スーパーマーケットで見かけたエピソード」が紹介されている。ソフトクリームを食べている兄弟のうち、弟がクリームを床に落としてしまう。周囲の大人は「仕方ないわよね。」などといいながら、助けてあげようとしないうちの気まずさをごまかし、すーっといなくなってしまう。これにたいし「そんなときはどうすればいいでしょう」と問いかける。

臨場感あふれる情景描写に、つい自分もその場に居合わせたように、自分の行動を考えてしまう。

次の段落では、「他人が買ってあげるのはいりすぎ」「お店によってはサービスしてくれるところもある」という、常識的なバランス感覚、現実的な第三者にゆだねる方法を示しながらも、「一声かけてあげれば良かった」という大前提としての「行動」を示唆してエピソードの紹介を終える。

ここまででも、十分に「思いやりの行動を起こすべき」「勇気が出ない」という葛藤状態に子どもたちを追い込むジレンマ教材として通用しそうであるが、この資料のよさはそれだけに止まらない。

「目の前で起きている出来事は、すべて自分に何かを気づかせるために『起こされている』ものだという気がしてなりません。」と、道徳的価値の一般化への道も指し示しているのである。

（※引用許可済み）

5 児童について

※「道徳実践レポート」参照

6 他の教育活動との関連について

※別紙「道徳年間計画」参照

※※「学級経営案」参照

7 本時の学習

(1) ねらい

資料中の人物の語りを通して、「傍観者」にならないために当事者意識を持って状況を判断し、行動しようとする心情を育てる。

(2) 展 開

	学 習 活 動	教師の関わり	留意点・評価
気 付 く	1. 巻紙冒頭の空白を考える。 ・何が入るかな？ ・「やさしさ」かな？ ・「思いやり」じゃない？	1. 巻紙冒頭を示す。	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が注目するように促す。 ・自由な発言ができるように雰囲気作りをする。 ・ヒントになる言葉に注目させる。
	2. 本時の学習の方向性を知る。	2. 正解を提示する。	
と ら え る	3. 「弟」の状況を捉え、自分だったらどうしたらいいか考える。	3. 巻紙をひらき、着語指導する。	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて、人物やイラストなどを板書する。 ・個人で自由に発言させた後で、必要であれば班での話し合いに移項する。
	「ザ・ベスト」な方法を考えよう		
み つ め る	4. 話し合いの結果を発表する。	4. 「なぜそう考えたのか」を詳しく話せるように聞き取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・重要な部分は板書する。
	5. 巻紙の続きを読み、語り手の価値観にふれる。	5. 子どもの発言と重ね合わせながら、解説していく。	
つ な げ る	6. 巻紙の最後の部分を読み、自分の問題として考える。	6. 語り手の意図が捉えやすいように適宜解説する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「行動を起こさなければならぬ」と思えるときである。
	現在、何かを考えるために「起こされている」のだと思えるような出来事がありますか？		
	7. 思ったこと・気がついたこと・考えたことを書く。	7. ワークシートへの書き込みを支援する。	<p>【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「とらえる」4での発言およびワークシートから子どもの道徳性を見とる。 「行動を起こす」大切さに気がつけたか。 実践への意欲が見えるか

